

第二百五十七話 持たざる国の苦悩！

日本は地政学的に極めて脆弱である。その脆弱性を如何に克服するかが国家の最大なる関心事項であり、日本の苦悩もそこにあった。総力戦時代の大東亜戦争は、正にその宿命との戦いであった。



1 日本の地政学的地位を与件とする宿命

大陸の近縁部に位置する日本は、古来より、大陸からの軍事的脅威特に朝鮮半島(日本の脇腹に突きつけられた短刀にも似ている。)を経由する圧迫に抗してきた。日清・日露戦争も、朝鮮半島の覇権阻止であり、突き詰めればそれに起因する。

更には、かつては、四面環海は防衛上有利であったが、近年の海軍力の向上はその利を減殺させつつある。

また、日本は資源小国であり、重要な戦略物資を外国からの輸入に依存せざるを得ない、云わば「持たざる国」であった。それは現在においても変わらない。

2 持たざる国の生存発展戦略

1 項を与件とする日本が生存し、発展するためには、第一：資源等を海外に求める 第二：足らざるを国民の勤勉さや優秀さ、精神力で補填 第三：自らの生存を他国に委ねる 第四：持てる国との同盟・合従連衡、持たざる国家等との連帯等が考えられる。

3 第一次大戦を受けての苦悩

日本は第一次世界大戦において戦勝国の一翼を担い、欧米列強と伍し得るようになった。日本は第一次大戦から、「将来戦は国家総力戦」という現実を突きつけられた。持たざる国が国家総力戦を如何に戦うか、それが国家戦略上の最大の課題であった。

持たざる国としての国家戦略には、1 海外権益を拡充し国力を増強 2 国家総動員体制を構築(不足する有形戦闘力を無形戦闘力で補う。) 3 敵の態勢未完に乘じ速戦即決、短期決戦により勝利を獲得 4 圧倒的戦力を有する国と不戦(国際協調主義)等がある。この変形としては、「1, 2 項により戦力を造成しつつ敵戦力の撃破を追求」があろう。これこそが日本が最終的に選択した戦略だったのだが、要らざる米国奇襲作戦で米国民の戦意に火を点けてしまった。

4 日本の苦悩

陸軍が、軍事力造成に限界を感じ、精神主義を高揚させ、日清・日露戦争で獲得した権益の維持に拘ったのも宣なるかなと思わざるを得ない。より精神主義を過激化させる方向か、国家統制の強力化を追求するかで陸軍が分派・分裂もしたとも云える。

我に数倍する大国と戦わざるを得なくなったとすれば、米国に奇襲的攻撃を仕掛けて戦意を破砕するか、海外資源を獲得して国力・戦力造成しつつ戦うかの方策しかなかったのかもしれない。然し、戦力造成と言っても容易ではないし、奇襲的攻撃で戦意を破砕し得る見込みは殆どないだろうし、明確な国家戦略を策定すべき政治的リーダーシップも存在しない。東条さんが軍令・軍政そして政軍関係を一身に背負うとしたのもこの由縁だ。北の脅威、大陸作戦の困難さを感じつつ、如何に当面の危機を乗り越えるか、日本要路の苦悩は深かったのだろう。

日本の問題点は、その苦悩を解決すべき政治システムを持たなかったことにある。欽定憲法の瑕疵である。問題の所在は解っていてもそれを解決すべき強力なリーダーシップの出現を憲法が阻んだのかもしれない。平時のシステムで有事を乗り切ろうとしたことが問題だ。現在の日本でも当て嵌まる様な気がするのだが・

(了)